ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.132

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

ケレ(靴)

村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)

私が「ケレ(靴)」に興味を持つきっかけとなった『アイヌの足跡』に「履物は夏冬とも裸足を普通とし…山の熊狩りや鹿狩りまた旅行などに出るには、ケレという履物を履く。…」の記述とともに、サケ皮のチェプケレ、ブドウ蔓(づる)の皮を編んだ草鞋(わらじ)のようなストゥケレについて書かれています。動植物の特性、特徴を活かした、機能的で時にはスタイリッシュでもあるアイヌのケレについて、いくつか紹介しますね。

ケレのスタンダードといえば、やっぱりサケ皮製のチェプケレ。使用するサケは、産卵後のいわゆるホッチャレの皮が厚く、丈夫で良いといいます。腹開きにして、二～三日干してから身を剥ぎ取り、皮は乾燥させておき、使用する際に水やぬるま湯に浸けて、柔らかくして使用します。一足分の製作には、靴のサイズやデザイン、素材となる皮の大きさにもよりますが、二～八枚のサケ皮が必要。製作にはサケ皮の他、皮を裁断するマキリ(小刀)、皮針、縫糸、靴紐(ひも)を準備。縫糸や靴紐にはツルウメモドキの繊維が丈夫で、極寒で紐が凍りついても結び目が解けないことが無いのだといいます。サケの背ビレは滑り止めになるよう靴底に配置し、足をすっぽりと包むように縫製します。形はくるぶしが隠れる程度の短いものから膝丈の長いブーツなどがあります。

シカ皮製のユクケレは、くるぶしが隠れる位の短い丈。使用するのは毛が短く、皮の厚い脛(すね)部分だけなので、一足つくるのにシカ二頭分の脛皮(すねがわ)が必要。縫製には丈夫なスンチ(腱)やツルウメモドキの糸が使われます。

サハリンでは靴をキロとも呼び、丈長のブーツや短ものもあり、外履きだけでなく室内履きもあります。魚皮であればイトウやサケ、マス、海獣であればアザラシやトドなどの皮が使われます。アザラシの中でもアゴヒゲアザラシの成獣の皮は厚く、丈夫なことから良く利用され、脛の部分には斑(まだら)入りの毛皮が好まれたといいます。また、靴底の皮は木灰と海水を使って脱毛して使用するとのこと。

三十数年前、静内のフッチ(お婆さん)にチェプケレのつくり方を教えていただきました。用意したサケ皮が硬くてうまく針が通らず、「皮はもっと、リテン(柔らかく)しないと…」など皮の処理や準備についても細かくご指導いただきました。ものづくりには丁寧な処理と準備が肝心と、強く心に刻んだ体験でした。 J

イラスト／山丸ケニ

次回のテーマは「カッコク(カッコウ)」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。